

Library Navigator

立命館大学 図書館だより
ライブラリーナビゲーター

ISSN 1345-3343

Vol. 127

Spring/Summer
2021



図書館イメージキャラクター：よむりす

〔図書館長からのメッセージ〕 新入生の皆さんへ

重森 臣広

立命館大学図書館長 政策科学部教授

〔特集〕 密着レポート

調査のスペシャリスト集団 「レファレンス・ライブラリアン」 を辿る!

竹田 華子

OICライブラリー レファレンス・ライブラリアン

大城 伊織

BKCメディアセンター レファレンス・ライブラリアン

〔連載企画〕 図書館の使い方がうまいヒト 第3回
谷口忠大（情報理工学部 教授）

〔連載企画〕 Library Collections 第1回
「卒業する諸君へ」と末川文庫

新入生の皆さんへ

重森 臣広

立命館大学図書館長 政策科学部教授



1959年北海道生まれ。中央大学法学部、同大学院法学研究科で政治思想を専攻。1991年、熊本大学専任講師。1994年に政策科学部が設置されると同時に立命館大学へ赴任。趣味はドライブ(ほとんどが通勤)、音楽鑑賞(クラシックとジャズとピアノが好き)、読書(ほとんどが仕事)。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新型コロナウイルスの感染拡大への対応が始まってから一年以上が経過しました。本学でも、オンラインによる授業の実施、課外活動の制限、実験実習やフィールド研究の制約など、平常時とはまったく異なるキャンパス運営を余儀なくされました。みなさんも受験勉強をはじめ、大学入学準備に苦労されたのではないかと思います。

苦境や危機は、私たちにさまざまな我慢を求めます。願いがかなわなかったり、計画を断念せざるをえなかったり、大小さまざまな失意や失望をみなさんも多く経験されたことでしょう。しかし、苦境や危機の経験を通じて、私たちは平常時とは異なる視点や視野をもつことがあります。みなさんの記憶に残っているところでは、10年前の東日本大震災で、自然の力の脅威に戦ったと同時に、それに伴って起こった原子力発電所の事故を目の当たりにして、文明生活を支えるエネルギー供給、防災、互助や共助の必要性について、考える機会が得られたのではないのでしょうか。

現在の日本と世界が取り組んでいる新型コロナウイルスの蔓延も同じで、大学における研究活動もそうした視点と視野拡大が大いに求められています。それぞれの専門領域で蓄積された知見と知見を相互に吟味することで、苦境と危機を乗り越える新しい知識領域を開拓する努力が求められています。コレラ、腸チフス、猩紅熱の蔓延に悩まされた19世紀ヨーロッパでは、「社会医学 (Social Medicine)」が新たな知識領域として誕生し、これがその後、公衆衛生学、都市計画の発展につながっていきました。

21世紀も苦境と危機は、いったいどのような知識領域を生み出すことができるのでしょうか。入学された学部・学科でそれぞれの専門的知見をしっかりと学びつつ、知識と知見の刷新を見据えながら、学問それ自体のイノベーションを達成することを、若い世代の皆さんに期待して入学のお祝いとさせていただきます。

図書館長おすすめ本

『ラ・ロシュフコー箴言集』

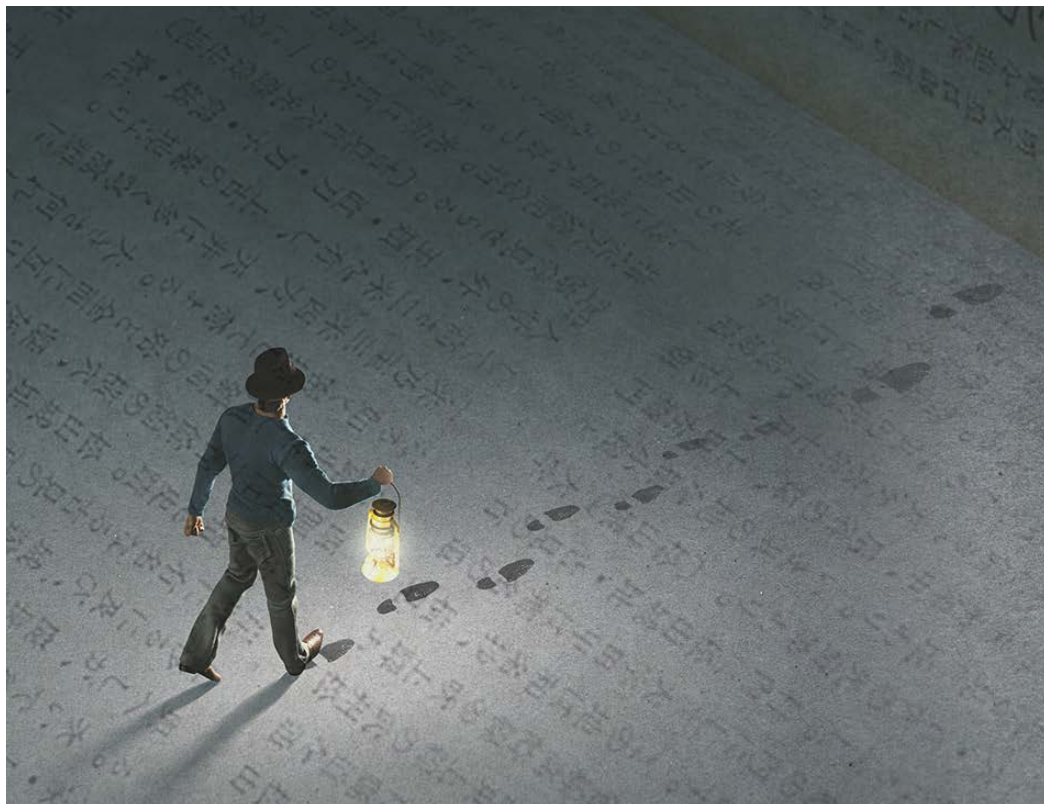
二宮フサ訳、岩波文庫赤版



人との関係で憤慨したり、逆に自分の愚かさが厭になったりすることがある。そんなとき、『ラ・ロシュフコー箴言集』の格言めいた人間論を味わってみることをおすすめします。徳と悪徳、友情と愛情、運命などを主題とする珠玉の格言は、「人間なんて…」 「人間だから…」に続くさまざまな回答の集成で、有頂天になっているときも、意気消沈しているときも含めて、ざわついた気分を落ち着かせてくれることでしょう。最近のお気に入りには93番の「年寄りには、悪い手本を示すことができなくなった腹いせに、良い教訓を垂れたがる」です。

調査のスペシャリスト集団 「レファレンス・ライブラリアン」 を辿る!

竹田 華子 (OICライブラリー ライブラリアン)
大城 伊織 (BKCメディアセンター ライブラリアン)



みなさんは、レファレンス・サービスという言葉を知っていますか？言葉は耳にしたことがある、という方は、サービス内容を知っていますか？自分のリサーチクエストを明らかにしていく際（つまり、研究や学修を深めるプロセス）に必要な「先行研究調査」「参考文献検索」といった作業。これをサポートしてくれるサービスです。参考文献検索や先行研究調査は地道で時間を要する作業ですし、どこから検索にかかればよいか、探し方がわからなかったり、あと一歩のところ、どうしても最後の扉が見つからないといった時。そこを研究者や学修者とともに調査のサポートを担うのが、「レファレンス・ライブラリアン」です。

今回は、2名のレファレンス・ライブラリアンに密着し、情報にたどり着くプロセスをドキュメンタリーでレポートします。



STORY #01

「宇宙食のカロリー」が載った 文献を探し出す

竹田 華子

OICライブラリー レファレンス・ライブラリアン

目的の資料にたどり着く道筋を ナビゲートする。 それがライブラリアンの役割

「宇宙食について調べたいんですけど。明日のお昼までに何か文献を見つけられるでしょうか」。

大阪いばらきキャンパス (OIC) のOICライブラリー。カウンターに座るライブラリアンの竹田華子のもとに学生がやってきたのは、ある日の昼休みのことだった。「おそらくレポートの課題なのだろうと想像しましたが、『宇宙食』というだけでは漠然とし過ぎていて、どのような文献を探せばいいのか見当をつけられません。まずは学生さんに何について調べているのか、もう少し詳しく話を聞く必要がありました」と竹田は振り返る。

ライブラリーのカウンターには、日々さまざまな問い合わせが寄せられる。教員や大学院生から研究分野に関する論文や文献を入手したいという依頼もあれば、一般書籍にはない極めて限定的なテーマや事柄に関する資料、新聞記事・特定の統計データを探したいといった要望もある。大学の図書館や一般の書店にはない文献や、教員や学生が調べても見つけられない情報を専門的な知識や手段を駆使して探し出すのが、ライブラリアンの役割だ。一方で、「調べ方」がわからないために資料を見つけられないという学生も少なくない。そうした学生にどうしたら求める資料にたどり着けるのか、その道筋をナビゲートするのも自身の役割だと竹田は任じている。

「それ以前に、そもそも自分が何を研究・調査したいのか、はっきり決めないまま闇雲に文献を探そうとする学生さんも少なくありません」と竹田は言う。ライブラリアンに詳しく研究内容を説明するうちに、漠然としていた研究のテーマや方向性が明確になってくることもあるという。

この日も竹田は、研究内容を絞り込むために「いつ、どここの宇宙食の情報がほしいのか」、「時間」と「場所」を限定するよう尋ねた。「学生の答えは、現代の宇宙食ではなく、マーキュリー計画時代 (1958年～1963年)、ジェミニ計画 (1961年～1966年) 時代、アポロ計画時代 (1961年～1972年) といった宇宙開発黎明期の各時代の宇宙食について知りたいというものでした。メニューの種類に加えて、カロリー数値が分かればなお良いとのこと。話を聞いてみると、ある程度明確な構想があるのだということがわかってきました。それなら、この3つの時代のアメリカ・NASAにおける宇宙食について調べましょうと話しました」と竹田。時代と場所をある程度特定したところで、調査を開始した。

スペシャリストの着眼点で データベースから情報を絞り込む

ライブラリアンは、立命館大学が所蔵する書籍・雑誌・論文はもちろん国内外の大学や公的機関が保有する文書を探索したり、世界中のさまざまな機関のデータベースや立命館大学が契約している数々の有料学術専門データベースにアクセスするすべを心得ており、必要に応じて資料を取り寄せたり、他の大学や機関の図書館に入館する手続きを手伝ってくれる。調査にあたっては複数のライブラリアンが協力し、互いに情報収集。難しい調査案件にもチーム力で応える。

しかし今回の調査にあたっては、もう一つ課題があった。与えられた時間が少ないことだ。文献の調査依頼を受ける場合は、通常1週間程度の調査期間を設けているが、今回の期限は翌日の昼。「今回のテーマなら、関連書籍は数多くあるだろうと思いましたが、他大学や立命館大学の他のキャンパスなどから取り寄せる時間はなさそうです。他のスタッフと手分けして、OICライブラリーか、学生さんが直接訪ねられる近隣の公共図書館に所蔵されている文献、あるいはインターネットから入手可能な資料を探すことにしました」。単に資料の有無を突き止めるだけでなく、現実入手・閲覧できるかも含めて考え調査範囲を決めるという。

「まず手がかりを得るためGoogleで『NASA History』とキーワードを入れ、検索するところから始めました」と竹田。そこですぐに目をつけたのが、NASAのホームページだった。公的機関の多くは研究成果や統計資料などのデータベースを持ち、ほとんどの情報を公開している。それを知っていた竹田達は、NASAが公開しているデータベースがないかを探索。するとテーマによっていくつものデータベースが存在することが分かった。

その中から「NASA History」というサイトを選び、「space food history」で検索を試みたところ、35万8000件もの資料がヒットした。これではまだ候補資料が多すぎる。竹田達はさらに「アポロ時代 (apollo)」「ジェミニ時代 (Gemini)」「マーキュリー時代 (mercury)」「カロリー (calories)」などのキーワードを追加し、組み合わせを変えながら検索を続けた。それぞれの検索結果にざっと目を通し、キーワードを多く含んだ資料、公的機関の出した信頼性の高い資料など、目星をつけた資料は簡単に内容も確認する。例えば「space food system Gemini」で検索した結果からは、冒頭に「SP-202 Aerospace food technology」と書かれた論文を見つけた。「これは関係あるかもしれない」と判断した竹田はリストに加えた。

膨大な情報を保有するデータベースから目的の資料を見つけ出すの



は簡単ではない。依頼者から得た情報をもとにスペシャリストならではの着眼点と発想で的確な検索ワードを選び、さらに検索範囲を絞り込んでいく。そこがライブラリアンの腕の見せどころだ。

そうしていくつかめぼしい資料を見つけ出したものの、いずれにもカロリーに関する記載はないことがわかった。そこで竹田は一旦目を転じ、アーカイブにあった「NASA Technical Report」という文書に着目。Googleで検索して「NASA Technical Report Server」というデータベースがあることを探り出した。「ここにも宇宙食のメニューに関する資料があるかもしれない」。そう思った竹田は、試

しに「Food Consumption Gemini」と検索すると、1427件の資料がヒット。その中に、ついにジェミニ時代の宇宙食のメニューとカロリーが掲載された資料を発見した。

遠慮せずにどんどん相談してほしい

翌日昼、再びライブラリーにやって来た学生を前に、竹田は自身が調べた通りに検索過程を再現し、最終検索画面まで誘導してみた。


通常レファレンス・ライブラリアンは、さまざまなデータベースを検索した最終結果を検索履歴とともに利用者に伝える。その中から自分が必要とする文献を探すのは利用者自身だ。たとえ求める文献がなかったとしても、検索履歴がわかれば後で自ら再探索する時に無用な重複を防ぐことができる。論文や研究資料を調べ慣れている教員や大学院生には、あまり知られていないデータベースや検索範囲の広げ方をアドバイスすることもある。

「学生の皆さんには、まず資料の探し方を知ってほしい」と、竹田は検索結果を説明する理由をこう繰り返した。どのようにデータベースを探し出し、どのようなキーワードで検索すれば目的の資料を見つけられるのか。それを自分のものにできれば、今後、研究や課題に取り組む上でもきっと役立つはずだ。

STORY #02

1931年7月17日、和歌山県の日曜学校にいた「小笠原」とは？

大城 伊織
BKCメディアセンター レファレンス・ライブラリアン



調査スキルを駆使して わずかな手がかりから資料を探し出す

さまざまな検索ツールと高度な調査スキルを使って少ない手がかりから研究者が見つけれない資料を探し出し、陰ながら研究を後押しする。そんな図書館の「調査のスペシャリスト」がライブラリアンである。びわこ・くさつキャンパス（BKC）のメディアセンターの大城伊織もそんなライブラリアンの一人だ。日々、多岐にわたる分野の教員からの難度の高い調査依頼に応えている。

そんなある日、大城のもとを一冊の資料を携えた教員が訪ねてきた。『東亞遊記』という1933年に発行された古い資料を開くと、あるページに「1931年7月17日に齊魯大学の教員と学生が和歌山を訪問し、拝日学校で交流した」という旨が書かれてある。大城が教員に話を聞くと、「拝日学校とは日本語でいうキリスト教の日曜学校のことです。この学校が『小笠原』という人物によって開設されたいしい

ということまではわかったのですが、その『小笠原』氏がどのような人物なのか、まるでわからないのです」と言う。そこでこの「小笠原」氏について書かれた資料を探してもらえないか、というのが教員の依頼だった。

大城は、わずか1行ほどの情報を手がかりに「小笠原」が何者なのか、調査を開始した。

どのデータベースを選び、どのようなキーワードで検索するかがポイント

手始めに大城は、「小笠原」という人物がキリスト教関係者である可能性をふまえ、1930年代の『基督教年鑑』などに「小笠原」という人物の記載がないかを調べたが、めぼしい情報はなかった。やはり「小笠原」という苗字だけでは絞り込めない。そう思った大城は、次

の手を考えた。目をつけたのは、1931年7月17日という「日付」と、和歌山県という「場所」。「加えて、依頼者から齊魯大学が中国のミッション系大学であると聞いていました。戦前に外国人が和歌山県を訪れるのは珍しいことだったのでしょうから、新聞の地方面に記事が掲載されたのではないかと考えました」と大城は推理を明かす。

まず調べるべきは、新聞記事だと決めて、さっそく新聞記事のデータベースに向かった。立命館大学は、過去の新聞記事を検索できるデータベースと契約している。朝日新聞の記事を収録している“聞蔵Ⅱビジュアル”にて、日付と地方を絞って検索すると、大城の予想は的中。1931（昭和6）年7月18日付の大阪朝日新聞和歌山版に「和歌山城の豪華に驚く 日華親善につとむ齊魯大學教授一行」という見出しを見つけたのだ。記事には、齊魯大学教授たちの7月18日の行程が詳細に記載されており、一行が『小笠原嘗至夫』氏邸を訪問し、その後『国際聯盟和歌山支部児童部』の歓迎会に出席したことが書かれていました」と大城。ここで「小笠原」氏の本名と、彼に関係ある組織が判明したわけだ。

新聞記事に限らず、データベースやインターネットで検索する場合、キーワードの選択が目的の資料を探せるか否かの分かれ目になる。「依頼者から提供されたキーワードだけではヒットしないこともしばしばです。そんな時は、日本語を英語に変えたり、同義語や類義語を調べたり、または上位の概念の言葉に、あるいはより絞り込んだ具体的な言葉に変えたりと、さまざまなキーワードで検索します」と大城は明かす。ライブラリアンの語彙力や発想力が試されるころだ。検索の結果、新たに有望なキーワードが出てきたら、それを糸口に情報をさらに深掘りしていく。

「小笠原嘗至夫」というフルネームが分かれば、調査の可能性は格段に広がる。まず大城が調べたのが、“Google ブックス”という書籍の全文検索サービスだった。「通常の書籍検索サービスでは、書籍のタイトルに検索ワードが含まれていないとヒットしません。一方“Google ブックス”は、タイトルだけでなく本文内でも検索できるので、固有名詞などを調べる際に有効です」。その結果、大城はついに小笠原嘗至夫氏の経歴や業績が分かる文献をいくつか見つけ出すことに成功した。

さらに大城は、新聞記事に掲載されていた「国際聯盟和歌山支部児童部」という組織にも着目。「小笠原嘗至夫 国際聯盟和歌山支部児童部」といったキーワードで他のデータベースをいくつか調べた。戦前の資料などが幅広く収録されている「国立国会図書館デジタルコレクション」というアーカイブもその中の一つだ。大城はそこで国際連盟協会が発行した昭和6年度の報告書『国際聯盟協会会務報告』を探し出し、大阪朝日新聞の記事と符合する報告内容を見つけた。



最後に調査過程で見つけた関連情報として博物館の資料展の情報も添付し、大城は調査を終えた。

調べる対象に興味を持って 前向きに調べれば、自ずと道が見えてくる

ライブラリアンのもとに持ち込まれる依頼は、専門的なものばかりではない。「学生さんの中には自分が何を調べたいのか、はっきりしないままレファレンスカウンターを訪れる人もいます。例えば、授業で『〇〇について調べてください』と課題を出された時、とにかく『〇〇に関する資料はありませんか』の一点張り。〇〇に関する何を調べたいのか、具体的な切り口が見えていないのです」と大城は言う。

そうした問い合わせが漠然としている学生には、まず「レポートか課題ですか」と聞き、レポートを書くための道筋を教えるつもりで資料の探し方を説明する。「書き方」が分かって初めてどのような方向で文献を探し、どのような着眼点でそれを読めばいいのかも見えてくる。「たとえ教員から出された課題であっても、調べる対象について学生さん自身が興味を持ち、前向きに調査や研究に取り組み、問題意識や掘り下げたいポイントも自ずと明確になっていくはずですよ」とアドバイスする。「私たちが資料を探すだけなら簡単です。しかしそれではその場限りで終わっています。今後につながる情報を提供することで、図書館の利点を知り、もっと利用してほしい」と大城は思いを明かす。

レポートや課題、論文作成だけでなく、就職活動の後押しになる情報もライブラリーで得ることができる。「今後、〇〇社の面接を受けるので、企業情報を探す方法を教えてください」と学生が訪ねてきたことがある。

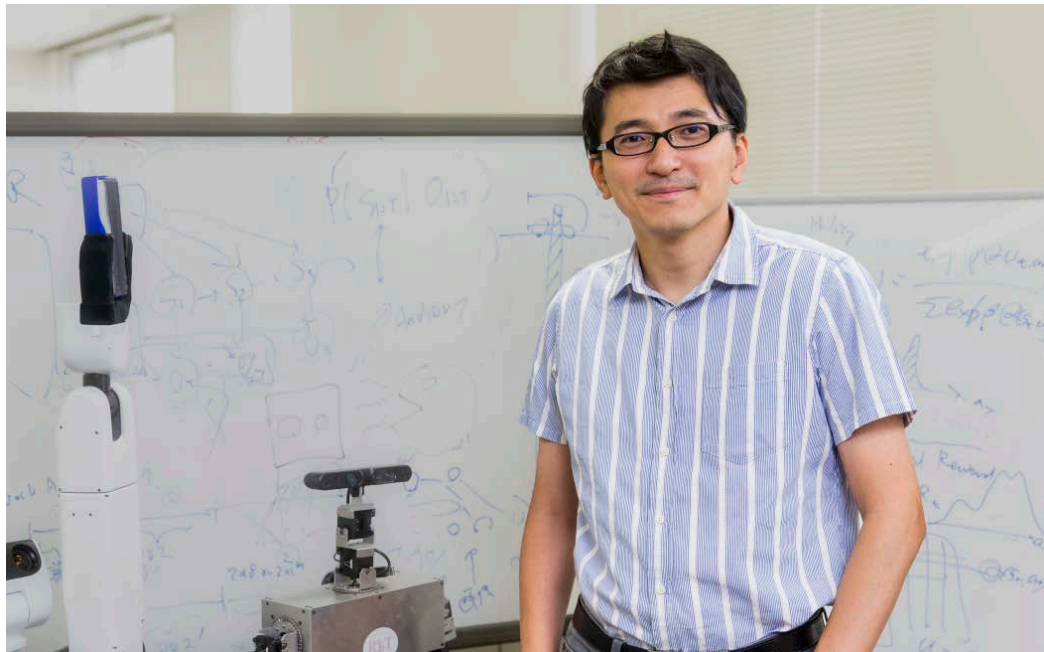
大城は立命館大学が契約している企業情報に関するデータベースを検索。企業が事業や業績について年度ごとに開示する有価証券報告書を紹介した。「その他にも過去の業界紙や経済紙といった新聞記事や経済系の雑誌に掲載された記事を調べると、業界全体の動向や目的の企業に関する注目すべきトピックが見つかることも。会社案内やホームページには載っていない情報を取得する方法を紹介することができます」と大城。「後日、無事に目標の企業の内定を得た学生が、お礼を言いに来てくれた時は、嬉しかったですね」と笑った。

ライブラリアンがどれだけ多くの情報を提示しても、学生自身に「知りたい」気持ちが無ければ、それらは単なる情報の累積のまま。大城は言う。「知識が増えること、新しい知を発見することを楽しんでほしい。私たちはそれを全力でサポートします」。



仲間とともに学び合うことで、 能動的な学びへ転換しよう。

谷口忠大
情報理工学部 教授



研究テーマ	記号創発ロボティクスと人間のコミュニケーション理解
専門分野	人工知能、知能ロボティクス、認知科学、機械学習
おすすめの本	「隷属の道」F.A. ハイエク 著、西山 千明 訳 春秋社 (1992)
おすすめのアニメ	「新世紀GPXサイバーフォーミュラ」サンライズ (1991)
著書	「イラストで学ぶ人工知能概論 改訂第2版」講談社 (2020) 「賀茂川コミュニケーション塾-ピブリオバトルから人工知能まで」世界思想社 (2019)

● 「AI (人工知能) × ロボティクス」をテーマに研究しています

AI (人工知能) は、知的な行動やふるまいをコンピュータで実現するものです。ではここでいう「知的さ」とはどのようなものでしょうか。人間は、生まれた時には一人で起き上がることもできませんが、やがて誰に教わることもなくハイハイするようになり、親の言葉を覚え、意味を理解し、社会生活を営めるようになっていきます。私が実現したいのは、そうした認知発達のプロセスそのものです。行動の一つひとつをプログラミングするのではなく、人間のように自らの経験から学び、発達していく。そんなロボットを実現したいと思っています。

● あらゆる分野に関心を持ち続けることで広がる研究の可能性

私の強みは、人文社会系の文献も数多く読んでいることです。私たちが「記号創発ロボティクス」と呼ぶこのアプローチは、ロボティクス分野はもちろん、それ以上に人文社会系分野の知識が欠かせません。人間の言語理解やコミュニケーション能力も発達段階に応じて進化していくもので、それを無視して言語だけに注目しても、本質を理解することはできないからです。

● 先生の研究分野での論文の見つけ方

論文や学術ジャーナルはいくつかの学術関連のデータベースで調べて入手しています。よく検索に使うのは、Google Scholarです。データベースでとりわけ活用頻度が高いのは、IEEE XploreやELSEVIER。IEEE XploreではIEEEの数多くの学会で発表された

最新の論文を読めるので役立っています。計算機科学の国際学会ACM (Association for Computing Machinery) で発表された論文もよく読めますね。近年、AIや機械学習に関する学会や国際会議の情報はすべて公開され、自由に閲覧できるのが時流ですが、arXivでは発表前の論文 (プレプリント) で最新の研究成果を知ることができるので、よく活用します。

- ▶ Google Scholar
グーグル・スカラー：学術文献のWEB検索サイト
- ▶ IEEE Xplore
アイ・トリプル・イー・エクスプローラー：IEEE (Institute of Electrical and Electronics Engineers：電気・情報工学分野の学術研究団体 (学会)、技術標準化機関) が提供する、科学技術系出版物にアクセスできるプラットフォーム
- ▶ ELSEVIER
エルゼビア：論文・学術書籍・ジャーナルの検索プラットフォーム
- ▶ arXiv
アーカイブ：物理学、数学、計算機科学、計量ファイナンスなどのプレプリントを含む論文が公開されているウェブサイト

図書館からの アドバイス

オンデマンドガイダンス

データベースの使い方、本の探し方について、いつでもどこからでも視聴できます。調べ方が不安な方はレポート執筆前に必ず視聴しておきましょう (RAINBOWのIDが必要です)。



論文執筆のためのアドバイス

● Readingからはじめよう。読むことは書くための基本。

とにかくまず論文を読みましょう。この一言に尽きます。文献を読むことは、学問の基礎です。基礎をおろそかにして、プログラミングやロボットへの実装といったアウトプットに偏ると、良い研究はできません。論文を読むことには、基礎知識を身につけることに加えて、論文の書き方を学ぶという意味もあります。まず最低30本の論文を読みましょう。その中で自分の琴線に触れるテーマを見つけたら、それを軸に関連分野の論文を調べていきます。学ぶとは、「真似る」こと。良い論文を知らずに良い論文は書けません。

● 論文やレポートを執筆する上でのアドバイス

「アカデミック・ライティング」の定石に則って書きましょう。論文は、小説や作文とは違います。例えば「段落」は「意味のまとまり」を表すものであり、一段落には必ず一つの主張を明示する必要があります。これをパラグラフ・ライティングと言います。また主張は、段落の冒頭に明記すること。言いたいことを最後に書くと、論点が不明瞭になってしまいます。さらにエビデンスや引用・参考文献を示すことも重要です。参考になるのは、ディベートによく用いられる「AREA」という手法です。「Assertion (主張)」、「Reasoning (理由)」、「Example (例)」、「Assertion (主張)」の頭文字をとったもので、「主張」、その「理由・根拠」、それを端的に表す「事例」、最後にもう一度「主張」の順に話すと相手によく伝わります。論文を作成する際にも、これを意識してみましょう。

図書館からの アドバイス

図書館 × SSP連携講座

図書館では「本の読み方講座」「レポートの書き方講座」などをオンデマンドで配信しています。ぜひ活用してください。



● 谷口ゼミ、ここがポイント！

ゼミではできるだけ教員 (私) の介入を減らし、学生同士で話し合うことを重視しています。残念ながらコロナ禍の現在は少し止まっているのですが、学生だけの勉強会を設けてゼミを運営してきています。学生自身にテキストを提案してもらい、自主的に勉強する機会をつくっていました。教員の説明を聞くのではなく、自ら書かれた内容を説明すると、自分がそれを理解しているかどうかを把握できるし、聞く方も話し手がその本のどこに関心を持っているのかわかります。

● 「ピブリオバトル」の目的とも重なること

「人を通して本を知る、本を通して人を知る」がピブリオバトル (本の紹介を通したコミュニケーションゲーム、谷口先生が創設者) の目的です。相手が選んだ書籍の情報に加えて、その人がどんな人なのか、何に関心があるのかなど、互いの理解を深めることができます。このように、教員の話や聞き手といった受動的な学びから能動的な学びに転換するという意味でも、自主的に学びあう勉強会は重要だと考えています。

● 「知りたい」という気持ちを忘れない

人と人とのつき合いの中では、疑問やわからないことを「まあ、いいやん」などとその場の空気を読んで議論をうやむやに終わらせてしまうことが少なくありません。しかし学問の出発点は、「わからないことは気持ちが悪い」という気持ちのほうです。だから「知りたい」という気持ちを絶対に忘れてはならないと常々ゼミ生には指導しています。

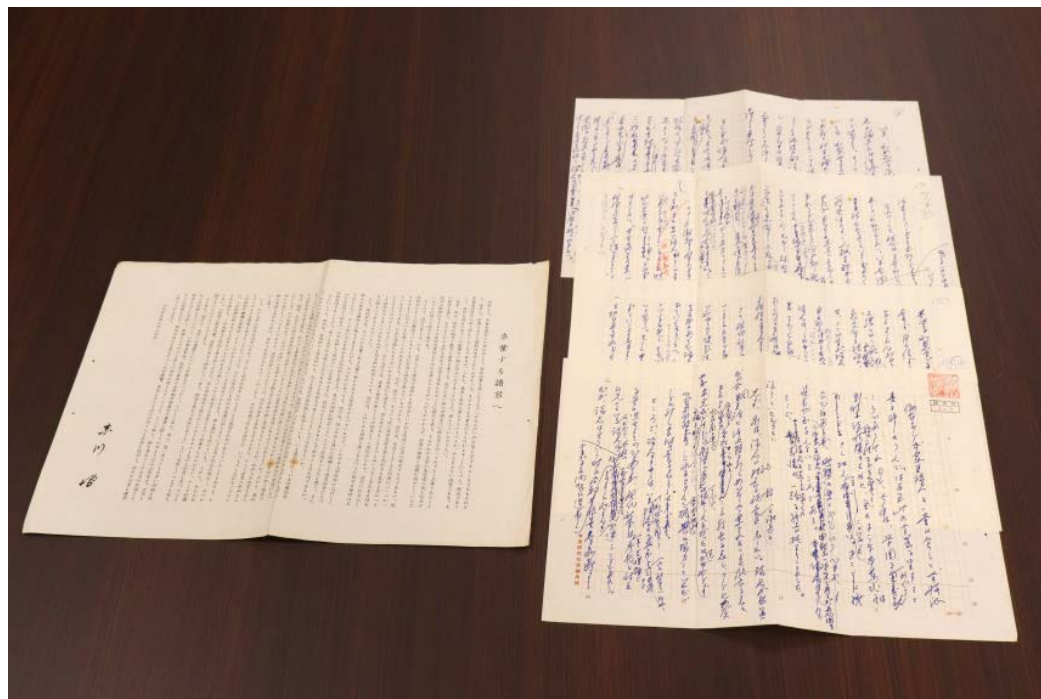
● 新学期を迎える学生みなさんにメッセージ

コロナ禍といわれる中、大学の講義自体はオンラインでも受けることができます。しかし新しい友人と出会い、サークル活動やアルバイトで多くの人と交流するといった、リアルな青春を謳歌することはままならなくなりました。これは大変に厳しいことです。でも今は仕方ありません。そのような時代に大学生をしているという運命を受け入れて、この時代ならではの青春を再構築し、withコロナの楽しみ方を見つけていって貰えればと思います。君たちの青春をつくれるのは、他でもなく君たち自身なのでから。

谷口先生の一日

6:30	起床 お風呂、朝ご飯
8:00	コーヒー、身支度
9:00	授業 (Zoom) 合間に、打ち合わせ (オンライン) や昼食
13:00	授業 (Zoom) 合間に、プロジェクトのミーティングやメールなどの処理
16:00	隙間時間に、論文記事や気になる書籍に目を通す
19:00	オンラインでの打ち合わせや学内業務終了 夕食、読書
21:00	就寝 (オンラインでの打ち合わせが続くこともしばしば。そのまま寝てしまうことも)

「卒業する諸君へ」 と末川文庫



「卒業する諸君へ」とその原稿

2019年度(2020年3月)の卒業式は新型コロナウイルス予防対策のため中止となりました。本学園の歴史を紐解くと、それより51年前(1969年3月)には、「学園紛争」により一部法・文両学部の卒業式が中止されていることが分かります。

「卒業する諸君へ」は、この卒業式が最後となった末川博総長が、「はなむけ」のこぼれを送ることができなくなったため、印刷して五千三百余名の全卒業生に贈ったものです。この文章の末尾に以下のこぼれがあります。

「ともあれ、諸君は、未来への展望をいだいて学園を去って行く。それとは逆に、私は、思い出すことの多い回顧を胸にこの学園を去って行く。一九四五年秋、敗戦の直後に立命館学園教学の重責を担うて以来まさに二三年有余。世界も日本も大きく変転し、学園もジグザグと激しい推移の道をたどってきた。そして私も、齢を重ねてこの三月任期満了とともに学園を去る。時勢の流れを見まもつて感慨無量。未来に生きる諸君の洋々たる前進を祝福し、諸君の自重と健康を祈つてやまない。」

この資料など末川先生が生前から本学園図書館にご寄贈されていたもの、御遺族からあらためて寄贈いただいたものが、平井嘉一郎記念図書館に所蔵する特別コレクションのひとつである「末川文庫」です。

『立命館大学図書館蔵末川文庫目録』に掲載された乾昭三法学部教授(1990年にこの目録が刊行された当時)の解説によれば、同文庫には以下の5つの特色があります。総じて末川先生の研究上または教育上必要な書物が大半を占めており、先生が実践的な読書家であったことが分かるということです。

- (1) 末川先生の全著作が網羅されていること
- (2) 河上肇博士(経済学者、末川先生の義兄)関係の著作が多いこと
- (3) 大正期から昭和期の民法学の著作がほとんど揃っていること
- (4) 中国・朝鮮・フィリピンをはじめアジア関係の著作が目立つこと
- (5) 人権擁護に先生が熱心であったことから、冤罪再審事件や労働運動弾圧事件に関する裁判資料が少なくないこと



『立命館大学図書館蔵末川文庫目録』

同文庫所蔵で先生が1964年に刊行した著作『時と人を追うて』の中の一節「未来をつちかうもの」に以下のようなこぼれも記されています。

「つかの間の栄光ではなくて、永遠の栄光と福祉。それをわれわれは求めなければならない。未来を信じ未来に生きる、そこに若い人たちの生命があるのだ。その未来と生命を自ら汚してはならず他から奪われてもならない。若い人たちは、現実の冷厳さにたえて、未来をつちかうために世界を見るべきである。」

この文章の中の「未来を信じ未来に生きる」のこぼれは、それよりも前、1953年に建立された「わだつみ像」の台石に刻まれており、現在、衣笠キャンパスの一角にこのこぼれを刻んだ記念碑も建てられています。当コレクションを通じて、末川先生の往時の考えや思いについて考える機会となりましたら幸いです。

なお、本学史料センターホームページの「立命館あの日あの時」に、当時の状況と「卒業する諸君へ」の詳細な解説が掲載されています。下記URLをご参照ください。

<学園史資料から>1968年度卒業生に送られた末川総長の手紙
<https://secure.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html?id=36>



参考文献(所蔵情報はQRコードからご確認ください)



『立命館大学図書館蔵末川文庫目録』
立命館大学図書館、1990。



末川博『時と人を追うて』
世界思想社、1964。